

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)特に気になった点</p>	<p>〈相談の傾向として〉 病院からの退院等による福祉サービス調整を行うことが多くあった。 〈本人の希望と優先すべきことについて〉 本人・家族・支援者の思いが異なり、支援が停滞することがあった。本人の希望する支援を中心にして検討をしなければいけないが、希望通りの支援が行えるとは限らない。本人と相談しながら「何を優先しなければいけないか」を一緒に考えることで継続して支援を行えるようになった。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p>〈他機関との連携について〉 通所事業所より「利用者で気になる方がいるため、一度訪問し状況確認をして欲しい」と相談があった。直接訪問し、自宅での状況を確認することで、本人の自宅での状況や疑問が解決し、今後の支援の方向性を見出すことができた。 〈介護保険への切り替え〉 65歳を迎えたことで制度の切り替えがあり、障がい者の制度との違いで本人が混乱をしてしまうことがあった。地域包括支援センターやケアマネージャーと連携をとり、1つ1つ丁寧に説明することで混乱の解消につながった。</p>
<p>課題</p>	<p>〈移動手段と費用負担について〉 車いすを使用していることで、移動手段が福祉タクシーに限られてしまうことがある。公共交通機関や一般のタクシーに比べ、費用負担が大きいことで、外出を諦めてしまうことがある。また、移動支援の対象にならない人は、介助者を必要とした時に自費での負担が大きく、その点でも外出を制限される要因となってしまう。 〈支援センターとしての関わり方について〉 一人暮らしをしていることで、健康管理や生活習慣に不安がある方もいる。支援者がその都度話をしても、誰もいなくなると生活が乱れてしまうこともある。本人の尊厳を考えると、あまり制限してしまうことは難しい。支援者としてどこまで関わるべきなのかを考えさせられることがある。</p>

障がい者生活支援センターかすがい

相談支援事業所 相談に関する報告 平成23年6月 ～ 平成23年8月

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)特に気になった点</p>	<p>「先の見通しが立たない事」、「自分の問題という意識が希薄な事」が原因で、他者への過度の依存や周囲との摩擦が生じているケースが複数あった。中には、障がい特性だけでなく、生活歴も影響していると考えられるが、許容できる生活(食事・居所・経済状況など)の捉え方にズレが大きく、本人が「困っていない」、「危機感を感じていない」ケースも多い。 その場合に支援者がどこまで踏み込むべきか、また本人よりも関係機関が困ってしまっている場合もあり、関わり方をどう調整するか、悩む事がある。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p>〈他職種・他機関との連携により精神科病院から地域移行〉 退院後に関わる日中活動・ヘルパー事業所などの他機関に加え、PSWを窓口 にOT・臨床心理士など様々な職種の方とも連携し、方向性を統一して支援したことで一人暮らしに結びついた。 〈亡くなった父親の支援者との連携が続いているケース〉 高齢の父親が亡くなり一人暮らしとなったが、父親の支援者は、今でも地域での見守りや立ち寄り場所として、活動的な本人の生活を支える資源のひとつとなっている。</p>
<p>課題</p>	<p>他害、発作などがある方がサービスに結びつきにくい。 日中活動場所への移動、短期入所の利用、施設入所、など</p>

障がい者生活支援センターまある

相談支援事業所 相談に関する報告 平成23年6月 ～ 平成23年8月

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)特に気になった点</p>	<p>世帯全体に支援が必要なケースが多く、一つのケースで複数の機関との連携が必要となるため、連絡・調整が毎月30%～40%を占めている。また、家族からの相談も全体の10%前後を占めている。</p> <p>相談内容の傾向としては、今までは「不安・気持ちの整理」がトップだったが、8月は「サービス利用・制度」や「健康・病院」に関する相談が「不安・気持ちの整理」とほぼ同数の24%を占めた。8月は家庭訪問、同行支援、面談のアウトリーチが多くあり、そちらに時間を割いたことで通常40～50%を占める電話相談の割合が35%となったことの結果かもしれない。</p> <p>相談者の背景には世帯全体の状況や長年の環境要因が複雑に絡み合っており、支援には長期的な視点が必要となる。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p><病院・かすがい若者サポートステーション・保健所>との連携 まあるへはご両親が来所され相談につながる。親御さん側からの話だけでなく、ご本人の思いや状況を知るために、ご本人の支援をしてくれている機関とも連携を取ることで、了承を得て関係者が集まる機会を設けた。そこで、今までの経過の確認や各機関の支援者から意見を出し合いながら現状の把握を行い、問題の整理や今後の支援についての方向性を共有することができた。</p> <p>また、それをご本人やご両親にもフィードバックしていき、各機関での相談は現在も継続している。</p>
<p>課題</p>	<p>精神分野での相談には明らかな症状があり病名がつくものばかりでなく、今までの生育歴や環境による生きづらさを抱えている人、機能不全の家族問題や嗜癖問題などで精神的な不調を訴えている方もある。適切な機関を紹介し繋ぐことでうまく行くこともあるが、個々を理解するまでに年単位でかかるケースもある。</p> <p>相談件数が増えるとともにアウトリーチも増え、目の前にあるケースに対応することはできても、気になるケースは後を絶たないのが実情である。</p> <p>また、所感でも述べたように、長年の関係性の中で起きている問題には長期的な支援と直接的な支援が必要とされる。</p>

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)特に気になった点</p>	<p>長期休暇前の個人懇談で子どもの発達や関わり方などについて、保護者が認識を深めたとき、相談が多くなる傾向がいつもある。しかし、その後の長期休暇中には生活の中で保護者にとっての「子育て」と「生活」に終始することになり、結果として認識が薄くなる傾向も推し量ることができる。日々の生活の中で、いかに「発達障がい」の特徴に対してのさりげない工夫(=支援)を取り入れるような相談支援につなげていくことができるのかと感ずる相談が多い。さらに、情報過多による子どもの成長と発達の過剰な心配が増えていると感じる。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p>〈児童相談センター〉 虐待が絡んだケースの母親のサポートと子どもの福祉サービス利用に関しての相談を依頼された。母親の足取りが重い状況ではあったが、児相の担当職員の方と根気よく時期を待ち、相談につなげることができた。</p> <p>〈市の保健師〉 ある母親から、子どもの発達、保育園への対応に関して相談を受けた市の保健師より協力要請があった。</p> <p>〈特別支援コーディネーター〉 8月の研修に参加された先生が、保護者との関係に悩んでいるとのことと来所された。今までどこで相談をしたらよいか分からなかったが、今後は相談していきたいと話された。</p>
<p>課題</p>	<p>〈顔の見える関係を広げていく必要性〉 相談者が抱える問題を、各機関とシェアしながらサポートしていく連携が少しずつ増えている。関係づくりを構築する機会を増やすことは、各関係機関で積極的に考えていく必要があり課題でもある。</p> <p>《早期支援に繋げるためには、「障がい」とらわれず「子育て」という保護者にとって入りやすい窓口が必要という観点も含めた課題である》 今年度よりピア相談の場をより充実するために開始した「スペシャルキッズ連続ミニ講座」では、発達障がいの基礎知識や、疑似体験、ことばやコミュニケーション、サポートの仕方など、様々な内容で開催している。思いのほかたくさんの方の参加があり、講座終了後には、毎回多くの相談がある。相談があるから講座に参加する場合もあるが、多くは「生活の中での子育ての悩みから障がいということを意識し始めた」という方も多し。相談の傾向でも触れたが、大半は、「障がい」というより、子育ての中、または、生活の中での子どもの相談である。「発達障がい」の概念が情報過多により保護者の捉え方が多種多様化している現状がある中で、どのように捉えることがよりベターなのかという点に着目していくことで、相談支援のありかたを子育て支援とどう絡めていくのが課題でもある。</p>